

## 写経のすすめ

写経というのは、経典を書写することで、古くはインドの大乗仏教において、すでに行われていたということですが。大昔はもちろん印刷という技術がなかったため、経文を覚えようとすれば、まず原文を借りて、それを書写することから始めなければなりませんでした。

以前、「鑑真和尚」という映画がありました。奈良時代、中国に留学していた日本の僧が、何年にもわたって苦労して写した数千巻の写経を、帰国の途中、嵐で舟が沈みそうになったとき、荷を軽くするために全部海に捨ててしまふ場面がありました。そのときの僧の狂わんばかりの無念さが、よくわかる思いがしました。

経本を写しとって、それを役立てるというのではなく、何かの願い事を込めてする写経は、平安時代から行われてきました。

ところで、人はなぜ写経するのでしょうか。人には皆それぞれ何かの願いがあると思います。家族の健康や安全、愛する者の幸せ、仕事がうまくいくように、老後の平安、さらには亡くなった人々への追慕、先祖供養、自分自身の罪業消滅など、心に思いはあふれても、それをどうすることもできないときがあります。

それを写経という形で表現するのです。一字一字に願いを込めて写経していけば、心に安らぎがもどり、自信がわき、努力に裏付けが得られると思います。昔から写経の功德は量り知れないものがあると言われていました。

当山では、皆様に写経の機会を持っていただくことを考えまして、毎月第一土曜日午後七時より「般若心経」の写経の会を行っています。

般若心経は、みなさんに一番よく親しまれている、全文二百七十六文字の極めて短いお経ですが、仏法の真髓が説かれています。その内容は、観音様が舍利弗尊者（お釈迦様の弟子）に仏の教えを説くかたちで書かれており、「この世のものの中には、すべて空である（実体がない。すなわち形あるものはすべて変化してゆき、やがてはくずれ、滅び、無くなってしまう）、その空をほんとうにわかり、自分のものにならなければ、真の智慧が得られ、迷いもなく、老も死も恐れることなく悟りを得ることができる」という、たいへん簡単なようで、実は深遠な哲理が述べられたお経なのです。

お経の書き方は、お手本を下に敷いて、その上からなぞって書きます。つまり写すわけですから、だれでも間違わず、上手・下手なしに書けます。筆ならばもちろん結構ですが、筆ペン、ソフトペンでも結構です。出来上がった作品よりも、写経することに意義があるのだとお考えください。一枚一時間あれば、だれでも書けます。慣れれば四十分位で書けると思っています。

書院前の庭園が完成いたしました。

写経の会参加者が少人数の場合、たまには、ここの静かな環境で、写経をしてみたいとも考えています。どうぞ一度ご覧ください。



どうぞこの機会に、亡くなられた両親・子供・水子・知人などの菩提供養のため、或いは生きていく人々のため、また自分自身のためにも、一度、写経を始めてみて下さい。

## 無学（むがく）

現代語では、学問や、常識が身につけてなく、修学していない人のことを称しているが、そもそもは、「もう学ぶことが無い事」を指していた。従って、仏道修行の最終段階まで修了し、すべてを会得した仏心の境地ともいえることを仏教語では「無学」としたが、これと反対に「有学」は、まだ、修業課程があり、勉学の途中の修行者を「有学」としていた。時の流れで、意味が変換されて解釈されるようになったが、いずれにせよ学問は、誰にも指図されなくとも、自分から、進んで、出来る時に修めるようにしたいものである。

仏教が生んだ日本語



## 空海の言葉 シリーズ

時機、**応ぜざれば我が師、黙念す**

時機が来なければ、お釈迦様は説法をなやらない

息が合う時、タイミングが合う時、これが時機です。春になると桜前線が南から北へ走りませんが、桜の花も、季節と桜の木の息が合わなければ咲きません。

密教では師資相承（ウチシユウ）といって、師僧が弟子に大切な秘法を伝えるには、師僧と弟子の息が合う時機をとっても大事にします。時機が来ないときは、いくら弟子があせって師僧に、「早く行法（ウチヨウ）を傳授してください」と頼んでも、師僧はだまつたままです。

「縁なき衆生は度し難し」